

## 難波西鶴と

## 海の道

【40】

森田 雅也

西鶴の『日本永代蔵』  
「元禄元(1688)」て物ごいをさせ、その  
金で生活すること12、  
13年にも及ぶという悪  
女でした。年刊「巻二の二」怪我  
の冬神鳴」に描かれた  
大津の人々の続きです。次に、池の川の針屋  
があげられますが、こ  
の居住地から、モデル  
は、今の大津市追分町  
にあった大黒屋森越清  
兵衛とされています。(大津市松本1、2丁  
目辺り)の後家です。この針屋の話は、他  
のよつな貧乏話ではあ  
りません。針屋は店の  
外見からは身代が小さ  
く見えるのですが、娘  
を京へ嫁付させたい  
ので、持参金を銀2千この女は、ひとり娘  
を田舎から出てきた伊  
勢参りの抜け参り姿に  
偽装させ、「抜け参り  
の者に御合力」と言っの約2億円)つける  
と言っていると、仲人  
婆が聞きつけてきて、  
「もう少し押せば約2  
千万円弱ももうかる」  
としょうゆ屋にさせや  
いてきたというのです。  
この当時、仲人は、  
縁談を成功させると、  
持参金の10分の1を報  
奨金としてもらって  
ましたので、仲人を商  
売としていた者が多  
く、この婆も同様です。「人の内証は知れぬ  
物、この大津のうちに  
もござまざり」とし  
て、大津にあっても外  
見より羽振りがいい商  
家があったことを伝え  
ているのですが、実在  
のモデルの連想に配慮  
した結果といえるかも  
知れませんね。  
(1)まで紹介した大津の話の視点人物はし  
ょうゆ屋の喜平次でし  
たが、最後に彼と妻と  
の逸話があげられま  
す。  
喜平次の女房はとて  
も賢く、子供も身ぎれ  
いに育て、人から借金  
もせず、師走の取り立  
準備もきちりと整え  
て、毎年を越していま  
した。とにしたのですが、わ  
ずか9匁が足りませ  
ん。そこで、そのため  
だけに24、25力所から  
お金を借りたために、  
年越しにあたり、方々  
から取り立てにあうと  
いう、しつかり者の女  
房としては、とても悔  
しい思いをします。  
喜平次は、「これを  
思ふに、当所のかなら  
ず違ふものは世の中。  
我も神鳴の落ちぬまで  
は、世にこはき物はな  
かりしに」と、生活設  
計の予期せぬ破綻に悔  
しさを隠せませんが、  
大津の人々の、予期せ  
ぬ西回り航路開発によ  
る不景氣到来の無念さ  
に通じるかも知れませ  
んね。  
(関西学院大学文学  
部文学言語学科教授)

## 予期せぬ不景氣の無念

## 喜平次と女房の年越し逸話